

「お授戒について」一

実は臨済宗のお葬式の前半部分は授戒会です。葬儀の際し、導師は亡くなった方に対し、生きている方と同様に授戒作法を行います。先ず剃刀で頭髮を剃る動作をしながら『剃髮偈』を唱えます。次に『懺悔文』を唱えてこれまでの行いを反省し、さらに『三歸依文』を唱えて仏教に帰依します。

その結果、戒名を授与するのです。

ですから本来戒名は「死後の名前」

では無いのですが、生前に授戒する方が少ないので、亡くなってからの名前というイメージなのです。

両親が我が子に名づける名前には、それぞれ「こんな人間に育って欲しい」という願いが込められています。それはそれで大切な親の思いですが、しか

し、俳句や茶道に精進するその人自身が俳号や茶名を名乗るのは、その人自身がその道に自分の生き方を見出しているからでしょう。同様に、仏教徒として仏の教えを守りながら、人として自分自身がどう生きて行くかを考える、縁となるのが戒名であります。

今回、親化授戒会に参加されますと、管長猊下より四字戒名のうち、二字を「安名」として授けて頂きます。是非、この機会にご参加頂き、生前から戒名を頂かれることをお勧め致します。

實相寺
花園会報

令和元年

七月一日発行

発行所

臨済宗妙心寺派

陽明山 實相寺

實相寺花園会

〒761-0450

高松市三谷町

1811番地1

TEL087-889-3838

編集発行人

山本文匡

<http://www.jissouji.net>

第123号

「遠山無限碧層々」

えんざんかぎりなくへきそつそう

前虎溪山住職
現南禅寺派管長

香南軒

中村文峰老大師

(昭和五年)

この禅語の意味については今月の『花園』に執筆していますのでご覧下さい。

このお軸は約三十年前、住職が僧堂で老大師のお世話係をしていた時、丁度今頃客間の掛け軸を掛け替えるよう指示され、たまたまこの言葉の掛け軸を掛けた処、珍しく老師に褒められたので、印象に残り、その後、墨蹟を書いて頂く機会があった際に書いて頂いた掛け軸です。



「しあわせとおかげさま」②

先月ご紹介した関西学院大学の藤井美和先生は20代後半の時、突然「急性多発性根神経炎」という難しい病気にかかり、数日にして手足はおろかまぶたも動かせない全身麻痺の状態となりました。意識障害は無かったそうですが、呼吸さえも困難な生と死の間で、「絶対にこのまま死にたくない」と思ったそうです。

「人は口で、自分はこっぴどい人間だと思っているものですが、実は本当の自分というものを知らないのかも知れない。本当の自分は、生きる意味を真剣に問われたとき初めてわかるものかもしれないーそう思いました。」と述懐しています。もう一つ、そうした極限状態の中で「お

金や社会的地位や名誉など目に見えるものや肩書きは、死に際しては少しも助けにならない」とも感じたそうです。麻痺が進んでだんだん呼吸が苦しくなる中で、敬虔なクリスチャンの家庭に育った藤井先生は、一晚、神様に「どうかもう一度生きるチャンスを下さい。人のために何かしたいのです」と祈ったそうです。

翌朝、朝日を見たときには「ああ私は生きていられた」という思いで涙がボロボロこぼれたそうです。しかし、束の間の「命を与えられた」という喜びも、先の見えない入院生活の中で「寝たきりで生きていかなければならない苦しみ」に変わったといいます。

藤井先生の入院していた病棟は、血液

と神経の難しい病気を患う人達のいる所で、ついこの間までいた方が亡くなるのは、何とも言えない気持ちだそうです。また全身麻痺のままりハビリに通っているうちに、そこで仲良くなった人達とは、病気は違えどお互いに辛い状況なので遠慮無く話したり、共感出来たりしたそうです。

一番仲良くなった方は、両親も家族もない方で、身体の苦しみと一人ぼっちの苦しみを持ち、最後の最後まで苦しんで亡くなっていったそうです。

また同じ病室の方が、余りの苦しさから窓から飛び降りようとしたそうですが、全く身体が動かず、声も出せない藤井さんにはどうすることも出来なかったそう

です。幸い、病院の窓は身体が全部出るほど開かないので、気づいたナースがかけつけ大事は無かったそうですが、その方はその後ずっと泣いていたそうです。およそ半年の入院と二年半のリハビリを通して、多くの患者が病気そのものの苦しみだけでなく、家族に対する思いやこれからの生活に対する不安、自分がどうなっていくのかや死の苦しみなど、様々な痛みを持っていることを知り、もしかしたら病気そのものの痛みよりも大きいのではないかということ学んだそうです。そして今の日本の病院には、患者の心のケアをするスタッフは殆どいないのが現状だそうです。奇跡的な回復の後、その為に働くことを考えたそうです。